

近年の中国(大陸)における古典研究

葛 兆光

北京・清華大学

一、近代中国における古典研究の概括

いわゆる「古典」とは、「今典」、つまり現代の必読文献との対比の上で言う言葉である。社会が「現代」の段階に入り、人びとの認識においても自らが「現代」に入ったと確認されたとき、はじめて過去の文献は現在の資料とはっきり区別されるようになり、いわゆる「古典」が生まれるのだ。われわれがいまよく口にする「古典」「遺産」ないし「伝統」などは、1895年に中国の古典的情念が終りを告げた後に、初めて現れた概念にすぎない。19世紀末、西洋学問の知識および思想が中国に流入してから後、とりわけ1895年の中日下関条約締結をきっかけとして、西洋的「富強」を志向する大きな時代背景のもとで、旧来の伝統に対する批判は新しい世界に溶け込んでいくための原動力となった。胡適や陳序経は、張之洞が提唱した「中体西用」を「全般的西洋化」に改め、ナショナリズムの背景の一つであった五四運動はコスモポリタニズムの性格を帯びた新文化運動と見なされ、1920年代の「科学と玄学」論争では「科学」が勝利を収め、魯迅の「国民性批判」が中国近現代思想・文学の主流となった。「西洋化」「新文化」「科学」などの語は、どれも「伝統」が没落したことを示すものである。また、「国民性批判」の背後に込められているのは前近代の文化に対する激しい憤懣であって、やはり「古典」の周縁化を如実に表している。こうして見ると、当時の中国は全体的に「西(洋)へ方向転換」し、「古典」を打ち捨てて全力で「近代化」を進めようとしていたように思われる。

しかし、ほかならぬこうした大きな時代背景のもと、古典に対する新しい研究と新しい解釈の動きが台頭しつつあった。「整理国故(我が国固有の文化の基礎的

研究)」と銘打ったこの研究と解釈は、これもまた主に胡適や魯迅・顧頡剛らの提唱の下、現在に至るまで続いてきた。この動きを起す内在的原因、或いは原動力となったのは、まさしく19世紀末に近代化の過程が始まって以来、中国が西洋の知識・思想・文化などのコンテキストにすっぽりと取り込まれていく中で出現したアイデンティティの危機にほかならない。すなわち、古典の中に民族と伝統のアイデンティティの根本を見出そうという期待こそが、当時であってあらためて古典を研究していこうという、近代における原動力となったのである。それゆえ、新たに中国自らの哲学史(胡適・馮友蘭・金岳霖・任繼愈)・文学史(林伝甲・黄人・胡適)・歴史(章太炎・梁啓超・夏曾佑)を構築するにあたって、彼らの目標となりつづけたのは、民族と伝統に対する自信を強め、それによって自ら(中国)を世界(万国)における一個の独立した、文化的伝統を有する文明的民族として位置づけること、さらには精神的に世界の諸民族と対等に肩を並べる存在となることであった。

つまり、20世紀の中国では、一方では伝統や古典の中にみられる精神に対する批判を通して、近代の潮流に溶け込み、世界の中へ加わっていくという動きがあり、また一方では古典の基礎研究とそれに続く発展的研究を通じて、民族的アイデンティティのための資源や民族を動員する力を探し求めることも期待されていた。よって古典の研究は、もはや伝統的な意味の学問ではなく、常に世界的背景から影響を受け続ける学問なのであるが、多くの人はこの点に気づいていない。さらに古典研究は、中国において常に大きな学問領域であり、歴史的に有してきた重みと現実における重要性、この二つの理由から、終始一貫して非常に重要な真の学問であると見なされてきた。「学問」の二字を

耳にすると、連想されるのが他ならぬ古典の知識である事は少なくない(たとえば、学問領域上は近現代文学に属する研究者でも、しばしば古い時代の研究にたずさわると、時に旧時代の叡智を羨ましく思う感慨をもち、自然科学者・経済学者・法学者は、現代においてすでに絶対的に重要な位置を占めているにもかかわらず、いつも古典の知識によって自己の教養・内面を表現しようとする。ある経済学者が示している古典の詩・詞への関心はその一例である。また、伝統を志向した室内装飾の趣味、書架にずらりと並べられた蔵書からは、一般大衆の「文化」志向が認められる)。

二、旧来の古典の解釈と新しい古典の発見

それでは、20世紀の100年間、古典の研究と解釈の方法はどのようなものであったのか? 古来より伝わる文献についての解釈は、もともと経学(所謂四書・五経などの儒学経典を研究する学問)とその手法によって独占されていた。つまり、経学の典籍であれ、史部の学問・子部の学問・集部の学問であれ、全ての古典は文字学・音韻学・訓詁学の方法によって正確に復原され、注釈・再注釈の作成、また原典からさらに論を発展させていくなどの方法によって、さらに踏み込んだ新しい意義が生み出される、というスタイルである。旧来の古典はこのような過程の中で、常に解釈を附され、新しい内容を生み出してきた。しかし、近代に入った19世紀末以降、西洋の学問領域編制の影響を受け、古典は文学・歴史・哲学などの異なるジャンルへと分割され、それぞれ新たに再編制を施され、西洋的知識を背景とした解釈を受けることとなったのである。一方では、「科学主義」の要求に基づいて古典の真偽・年代・作者などが考証され、古典の編年的配列が確立される。また一方では、中国にも西洋のような「文学史」「哲学史」がある事を裏付けるために、様々に手を尽くしては古典の中に「文学」や「哲学」が探し求められる。この二重の背景のもとで20世紀の「古典学」は形成された。この「古典学」が、いわゆる「中国の伝統」「中国の歴史」を事実上著述・構築し、こうした著作を読んだ人々は、これこそが近代以前の中国の思想であり、文学であり、歴史なのだと思つたのである。

またこの頃、中国では新しい古典が考古学によって発見されることが相次ぎ、新しい発見があるごとに、学術史上に大きな波紋を投げかけた。今世紀最初の二、三十年では、とりわけ甲骨文字・敦煌文書・大内檔 木 當 案(清朝の宮中に所蔵されていた詔書や上奏文な

どの史料)・流沙墜簡(ロブノール・ニヤ等の西域遺跡で発掘された漢・晋の木簡などの文字資料)の四大発見が学術の新領域を切り開き、同時に古典研究の方法に変化をもたらした。例えば、地下の考古資料と文献を用いた相互の検証、中国文化圏以外の文献と国内の伝統的文献の比較、人類学調査の資料と歴史文献の研究結果の対照研究など(王国維・陳寅恪)である。また四大発見は、古典を改めて認識し直そうとする意欲を、人々の心に掻き立てた(中国古典学の再構築についての裘錫圭の見解、古い文献伝承を疑ってきた「疑古」の時代を超えようという李学勤の呼びかけ)。ただ、こうした新発見や新しい方法は学術史上に大きな意義を持つものであるにせよ、基本的に今もなお20世紀の「古典学」の基本方針は堅く守られている、と言わなければならないだろう。この基本方針とはすなわち、科学と理性に基づいた研究方法を追求し、文化と伝統の歴史を解き明かすことによって、この文明の民族的特徴と世界的意義をしっかりと定めようとする事である。

古くからの文献に対しては、それまでも個々に基礎的研究が進められてきたが、特に文化大革命以後、政界と学界が民族及び伝統のアイデンティティの問題においてほぼ見解の一致を見たため、古典文献の校訂や編纂などの基礎作業は、重要な学術領域となり(古典文献の基礎的研究を推進するための国家および大学による二機構の設立、古典文献学研究所の設立と古典文献学専攻の設置、古典文献を中心とする出版社の出現)、大量の古典の校訂注釈と出版がすすみ(二十四史、『資治通鑑』と『続資治通鑑』、各種の文集や筆記小説の周到な校訂、『四庫全書』『続四庫全書』『四庫存目叢書』『古本小説』の影印)、過去に存在しなかった大型古典叢書の陸続たる編纂・出版が行われた(七全一海〔『全唐詩』『全宋文』『全宋詩』『全元文』『全元戯曲』『全明文』『全明詩』『清文海』〕、『伝世蔵書』『中華大典』『孔子文化大全』など)。しかし、そこに「盛世に書を編纂する」意図があることは措いても、こうした古典文献の整理のねらいや背景は、やはり往年の「整理国故(我が国固有の文化の基礎的研究)」の延長線上にあると言えるだろう。

ただし、近年の古典研究には、新しい状況も認められる。まず触れておくべきなのは、新しい出土文献の発見である。死海写本(The Dead Sea Scriptures)の発見が、かつてユダヤ教とキリスト教をめぐる歴史観に影響を与えたように、馬王堆帛書(1970年代)・臨沂銀雀山漢簡(1974)・睡虎地秦簡(1975)・張家山漢簡(1983)・定県八角廊漢簡・阜陽双古堆漢簡・尹湾漢簡

などの出土を皮切りに、今世紀後半に続々と出土した中国の古典は、世間を大いに驚かせた。私は以前、「古代中国遺有多少奥秘（古代中国にはまだどれほどの神秘が隠されているのか）」という標題で、この驚きを表現したことがある。とりわけ九十年代以降に引き続く新発見（荊門郭店一号楚墓〔1993〕・上海博物館の購入した二つの戦国竹簡コレクション〔1994 - 95〕・長沙走馬楼で発見された三国呉時代の竹簡〔1996〕・敦煌懸泉置漢簡〔1998〕など）は、こうした資料にいつそう人々の関心を向かわせるに至った。これら新発見の意義については、多くの学者が以下のように指摘している。（1）これら古典文献の再発見によって、中国古典の研究者たちは、「疑古」の風潮 - すなわち西洋的科学主義の束縛 - から逃れ、中国古典の分野に新しい評価の体系を打ち立てる可能性を生んだ。（2）上古中国の歴史及び思想が持つ連続性を人々に改めて理解させた。つまり、近代以前の中国は、過去に断絶を含む西洋の歴史や文明とは異なるものであり、中国の上古 - 中世 - 近世の間にはかなり明瞭な連続性があることや、西洋史を借りて中国を説明するのには無理があることを人々は信じるようになってきたのである。（3）近代以前の文明に関する研究が、従来の学問領域である哲学・文学・歴史の著述方式から脱却し始めた。栄光ある伝統を打ち立てるためだけの古典研究は行われなくなり、むしろ「中心」から「周縁」へ、「いわゆる典型と見なされる事象」から「より普通の、一般的に見られる事象」へ、「エリート思想」から「生活に遍在している観念」へと、興味の対象が移ってきた。つまりは、新しく発見された古典の中に、20世紀以降新しい観念や新しい方法に基づいて理解されてきた意味での「伝統中国」ではない、新たな伝統中国を見だし始めたのである。

三、古典学の再構築における注目すべき動向

しかし、近年の古典研究には、さらに新しい状況が現れ始めている。すなわち、古典学がその非実用性のために、日々没落の一途をたどっている一方で、新しい刺激の下に古典学が新しい発展の趨勢を見せているという状況である。とりわけ注目に値するのは、近年の古典研究の新しい方法が帯びている、ある種のイデオロギーや文化的傾向である。なぜなら、古典学の再構築は、単なる古典の解釈及び理解の方法論だけの問題ではなく、その背後にある根強いイデオロギーや文化的傾向が、常に古典学の行方に影響を及ぼすはずだからである。

その中で、重要な現象としてまず挙げられるのは、古典の研究を通して、あらためて民族全体を動かすための動員力と資源が求められている事である。これは20世紀に一貫して見られた傾向であるが、こうした傾向が次第に強まっていることを示す興味深い事例が近年いくつか見受けられる。例えば、「夏・商・周時代区分研究プロジェクト」の問題（エジプト・ギリシアとの比較）や、「古代文明研究プロジェクト」と「黄帝陵」「炎帝陵」祭祀の問題（龐樸の論文から始まった論争）、法顕アメリカ大陸発見説についての討論（章太炎「法顕が西半球を発見したことについて」から何光岳『商源流史』まで）などである。

第二の重要な現象は、古典の研究を通して西洋の現代批評理論、ひいてはポストモダンの批評理論を解釈し、伝統を現在の資源とする事である（例えば、中国古典詩歌の言語的研究によるデリダの言語観の理解、荘子を用いたハイデガーの解釈、仏教を用いた脱構築理論の解釈、など）。

第三の重要な現象は、大衆文化とマスメディア文化による、古典の解釈と俗化である。例えば、古典の歴史や文学の中に、現代人の嗜好に合う材料を探し出すこと（中国のテレビドラマでは、古いところでは唐代の歴史物語を脚色することが多く、新しいところでは清代宮廷の歴史物語を脚色することが多い。たとえば雍正帝の物語を借りて現代の政治状況を暗に描く、など）、面白おかしく歴史を語る風潮の影響（ミュージカル「新白蛇伝」、映画「新・梁山伯と祝英台」、さらにテレビドラマ「還珠格格」シリーズによる正統的歴史・生活の瓦解）、単なる飾りやパッケージとしての古典（流行歌にみられる「偽〔まがい〕古典」、流行のファッションに見られる「偽〔まがい〕古典主義」、考古学発掘現場テレビ中継のもつ商業的意味）などである。

古典学の再構築は、単に歴史学あるいは文献学の問題にとどまらず、おそらくは個々の国民国家ないし文化圏によって、異なった史的背景に出会い、異なった目標を掲げていくことだろう。ここでは、古典学の方法に共通するのはただひとつだけだ。つまり古典学の再構築とは、新しく選択し解釈を加えていく過程なのである。あるいは、古典学のもつ意義にも、ただひとつの普遍性しかない。つまり新しい解釈を加えていく過程で、古典学は民族を動員し、歴史的アイデンティティを再構築するための基礎としてはたらくのである。それはあたかも、「故郷」を探し求める中で、古典の選択と解釈が、どこが自らの故郷であり、誰が自分と同郷なのかを人びとに指し示すようなものだ。とはい

え，ここでひとつ，あらゆる人びとが警戒しておかねばならないことがある。それは，どうすれば古典は適度でかつ無理のない民族動員の原動力となることができ，極端なナショナリズムを生む歴史的資源となり果ててしまわずに済むのか，という点にほかならない。

2001年6月19日初稿，2001年8月30日再改訂

日本語訳：津守 陽
(京都大学大学院文学研究科修士課程)